

一九七 王公大人は固^{もと}より生民の疾苦^{しつく}を聞かざるにあらず。然れども終^{つい}に
是れ身其の間に際し、朝夕目視することの詳^{つまび}らかにして且つ実なるには如
かざるなり。

王公大人、固非^レ不聞^レ生民之疾苦、然終是不^レ如^レ身際^レ其間^レ朝夕目視之詳且
實^レ也、

【訳】王や高位高官の人はもとより人々の悩みや苦しみを聞かないというのでは
ない。しかし、結局は自身で朝夕自分の目で詳しく事実を見るということには及
ばない。

一九八 文王の民には凍餒^{とうたい}の老なし。今よりこれを觀れば、則ち殆ど天上
界の事に似て、人間世の敢へて望む所にあらざるなり。

文王之民無^レ凍餒之老、自今觀^レ之、則殆似^レ天上界之事、而非^レ人
間世之所^レ敢望也、

【訳】文王（周王朝の最初の皇帝）の時代には衣食が欠乏し、凍えて飢えるような
老人はいなかった。現在の様子からこれを考えてみれば、ほとんど天上界での事
のようで、とても現実の人の世では望めないようなことである。

一九九 行く者は道を譲り、耕す者は畔^{あぜ}を譲る。風俗の美かくのごとし。
此れぞ是れいはゆる聖世の民、比屋封^{ひおくほう}ずべきの処。

行者讓^レ道、耕者讓^レ畦、風俗之美如是、此是所謂聖世之民、比屋可^レ封處、

【訳】行き交うものはお互いに道を譲り合い、田を耕すものは境の畔を譲り合う。
くらしの中の美德はこのようことだ。このようなことこそ、すぐれた徳のある人
が治める世の人々は、みな報酬をもらって諸侯に匹敵するような人格、品格を備
えているということだ。

二〇〇 常に須^{すべから}く此の心をして清閑にして累^{わずら}いなからしむべし。日用の
間、黙黙として理を窮め、推して古今の史を読み、天下の事を料理す。此

れを除きて外は、博聞はくぶん雜技ざつぎ、得喪とくそう毀譽きよは、一切管せず、以つて吾が学を成す。蓋し精を励まし治ちを図るは、位あるものの事なり。心を専らにし功を用うるは、志あるものの事なり。上にあり下にあり、豈に優游として空しく過ぎて以つて誤ごちを一生に担おうべけんや。

常須使此心清閑無累、日用之間、默々窮理、推而讀古今之史、料理天下之事、除此而外、博聞雜技、得喪毀譽、一切不管、以成吾學、蓋勵精圖治者、有位者之事也、專心用功者、有志者之事也、在上在下、豈可優游空過以擔誤一生哉、

【訳】常に、すべてこの心を持つて、心静かに思い悩むことがないようにしておくこと。日常は、一生懸命物事の道理を極め、さらに進んで、古今の歴史書を読み、世の中のことをうまく処理していく。これを除いて他の見聞を広めるとか、いろんな芸を身に着けるとか、儲けや損や誇りや誉れなどの事とかには、一切関わりなく、自分の学問をする。そうした上で、精神を奮い起こして政治に励むのは、上に立つものとする事である。心を集中して、実践するのは志を持ったものとするのである。上に立つ人も下の人も、ゆったりしてむなしく過ごしていは、過ちを一生負うことになる。

二〇一 衛の懿公えいこう鶴を好む。夫のこれを好むの時に方あたりては、爵しやくを以つてこれを貴とつび、禄を以つてこれを養ひ、敢へて人を以つて鶴に易しえざるなり。而るに一旦寇境こうさかいを侵おかし、然る後乃ち鶴を舍おきて人を使ひ、以つて患うれひを救はんと欲するも、其の敗を取るや亦宜むべなり。

衛懿公好鶴、方夫好之時也、以爵貴之、以祿養之、不敢以人易鶴也、而一旦寇侵境、然後乃舍鶴而使し人、欲以救患、其取敗也亦宜、

【訳】春秋時代の衛の懿公は鶴を好んだ。その好みかたは、爵位をあててこれを大事にし、禄を与えて養い、人以上にした。それで、いったん外敵が国境を越えて入ってくると、鶴は置いておいて人を用いて外敵から守ろうとしたが、破れてしまった。もつともなことである。

二〇二 鬻拳いよくけんの君を諫いさむるや、諫むれども従はれざれば、これに臨むに兵を以つてす。固もとより以つて人臣の法と為すべからず。然れども人の君と為りて、臣の劫おびす所と為り、敢へて違たがふ能はず。還かえつて夫の我を愛するの

深きを喜びて、敢えて以つて乱を為さず。文王の君たる、亦甚だ法るべきものあり。

鬻拳之諫君也、諫而弗從、臨之以兵、不可爲人臣之法、然而爲人之君、爲臣所却、不能敢違、還喜夫愛我之深、而不敢以爲亂、文王之爲君、亦甚有可法者矣、

【訳】鬻拳は君主を諫めたが、聞き入れられなかったので、兵をもつて諫言に随わせた。言うまでもなく、これは臣下のすることではない。しかし、君主の立場であつたが、家臣に脅かされて、従わざるを得なかったのだ。凱旋して帰つた後、鬻拳が我を愛することが深かつたのだと喜んで、処罰はしなかった。文王も君子として態度は、大変見習うべきところがある。

二〇三 陳敬仲 桓公と酒を飲む。公の楽しみ且に火を以つてこれに繼がんとするに及ぶや、敬仲従わずして辞す。其の君を導くことの厚く、身を守ることの正しき、兩得と謂うべし

陳敬仲飲桓公酒、及公之樂且以火繼之也、敬仲不從而辭焉、其導君之厚、守身之正、可謂兩得矣、

【訳】陳敬仲が桓公と酒を飲んでゐた。桓公は大変楽しみ、夜まで飲み続けようとした。陳敬仲は、それに従わず帰つていった。自分の君主を導くことは大變厚く、自分の身を慎むことは正しく、陳敬仲はちゃんと両方とも身につけていると言ふことができる。

二〇四 諸生は講習の間、容貌は須く肅なるべく、視聽は須く專なるべく、心意は須く虚なるべし。然る後聞く所の話は始めて能く領會し了るを得。

諸生講習之間、容貌須肅、視聽須專、心意須虚、然後所聞之話、始能得領會了、

【訳】塾生のみなさんは講義を聴いている間は、身を引き締め、見たり聞いたり

する時には、ひたすらそれに打ち込み、意識は他の事は考えないで集中して聞かなければかなければならない。そうして初めて、聞くところの内容は、よく理解できるだろう。

二〇五 容貌^{さうぼう}肅ならず、視聴^{しきやう}専ならず、心意^{きい}虚ならざれば、則ち^{すなはち}仮使^{かとい}講に侍^じして年歳^{ねんさい}を経^{ふる}とも、此の学に於て果して何の得る所ぞ。

容貌不、肅、視聴不、専、心意不、虚、則假使侍、講經年歳、而於此學果何所得、

【訳】身を引き締めることなく、見たり聞いたりする事にも集中せず、意識も集中せず雑念があるなら、たとえ講義に出て年月を重ねても、ここでの学問に得るところなどないぞ。

二〇六 諸生、親に辞^じし包み、遠く来たりて相ひ随ふは、皆此の学の為なり。而して終年果して得る所なくんば、則ち家に帰るの後、何の面目ありて、復^{また}た郷里の父老に対せんや。

諸生辭裏糧、遠來相隨者、皆爲此學也、而終年果無所得、則歸家之後、有何面目、復對郷里之父老乎、

【訳】諸君が、親と別れ食料を携え、遠くからきて塾生となつて私に従うのは、学問をするためである。それなのに、学ぶ期間が過ぎても得るところがないとするなら、家に帰ってから、郷里の父を初めとして家族に会わせる顔がないだろう。

二〇七 男兒幸ひに生を天壤^{てんじやう}の間に受け、樹立する所ありて以つて其の名を成す能はずして、草木と同じく漸^{しん}尽^{じん}泯滅^{びんめつ}に帰するは、豈に惜しむべきの甚しきにあらずや。

男兒幸受生乎天壤之間、不能有所樹立、以成其名、而與草木同歸於漸盡泯滅者、豈不可惜之甚哉、

【訳】男としてこの天と大地の間に生まれ、しっかりと立つことができるのに、自分の人間形成ができず、草や木と同じように滅びてしまうなら、なんとおしいことではないか。

二〇八 山人、今汝輩に向かひて勸説かんぜいすることかくのごときは、特に汝輩ただの為のみにあらざるなり。山人も亦自みづから其の一日の責を尽くすゆゑなり。

山人今向『汝輩勸説如』是者、非特爲『汝輩』也、而山人亦所『以自盡』其一日之責也、

【訳】私のような山に住んでいる者が、今みなさんにこのようなことを説教するのは、みなさんのためばかりではない、私もまた自分の一日の勉めを果たすためである。